

[1] 本稿の議論は多岐にわたるが、その課題は今日の環境問題について検討を加えてみるところにある。初めに本稿の構成を概括的に述べてみよう。I のイントロダクションでは、20 世紀とはどのような時代であったのかという問題を取り上げている。II のセクションでは、今日、環境問題は文明史的問題として認識する必要があることについて述べ、「エコロジー」(ecology / 生態系ないし生態学) の定義について説明し、さらに今日の環境問題の切迫性について触れている。III においては今日の環境危機を成り立たせている諸事実に関して、とりわけ三つの問題圏に分類して説明がなされている。IV では、これらの環境危機の諸事実が示唆すると思われる意味を考察しようと試みている。最後に結びにあたる V において筆者は、「地球規模の生態学的政治」とでも称すべき文明史的段階に突入したという D・ピレイジスの議論を紹介しつつ、社会、経済、政治行政のシステム上の改編の必要性について論じ、とりわけ「生存の政治」の今日的可能性を検討している。

[2] さてわれわれは今、20 世紀の幕がまさに下りようとする歴史的時点、20 世紀の最後の一年に地球上に生息している。こうした歴史的時点にあたって、20 世紀とはどのような 100 年であったのかをよくよく考えてみる必要があるだろう。20 世紀は、経済的繁栄、科学技術の発展、人権保障や民主主義の発展など、文明の進歩が人類史に記された輝かしい世紀であったという見方も成り立ち得るであろう。しかし反面、20 世紀は混乱と混迷と苦悩の 100 年であったという理解も提示されている。現に一人の日本の政治学者は、最近の講演会で「20 世紀とはとてもない世紀だった」と語っていた。すなわち、20 世紀は、二度の世界大戦(トータル・ウォー)を経験し、全体主義(トータルитарリズム)の悪夢に直面した世紀でもあったとされる。20 世紀には加えて核兵器が出現し、第二次世界大戦の終止符を打つものとして、広島と長崎に原爆が投下された。その後も米ソ冷戦の状況下で 40 年にわたり際限なき軍拡競争が繰り返され、核兵器の脅威が世界を覆った。ポスト冷戦時代と呼ばれる 90 年代においても、20 世紀を特徴づけてきた暴力主義とイデオロギー支配は、今なお衰える兆しを見せていない。たとえば、現代科学技術の最先端において一部で「クローン人間」の製造がささやかれている。これなどは、現代社会に浸透している無思想性あるいは価値判断停止とも呼ぶべきイデオロギーが、思慮の欠如、無節操という仕方で、現代社会に根強い影響力を振るっている現実を示唆するものであろう。今日では政治のレベルでも、個人生活のレベルでも、財の拡大再生産、物質的繁栄、生活の便利さと快適さの追求という大義名分のもとに、無思想無節操の風潮が、「先進産業諸国」と呼ばれる多くの大衆消費社会において隅々にまで浸潤している。「20 世紀とは

31 とんでもない世紀であった」との主張は、まったく根拠のない命題ではない。それは、十分に  
32 吟味し検証してみるに値する命題なのである。

33 [3] 20 世紀は、科学技術的知と暴力主義と無思想性とが合体して、種々の異常事態を作り上  
34 げてきた。「知は力なり」とは、初期近代の科学革命を導出した思想家の一人、F・ベーコンの  
35 ユニークな知見でもあった。しかし、20 世紀における現代科学と科学技術の飛躍的進展は、皮  
36 肉にも後期近代における知の権力性と反倫理性とを際立たせる結果となった。科学技術の著し  
37 い進展は、さらに 20 世紀のイデオロギーとでも称すべき暴力主義と無思想性と結託すること  
38 によって、二度のトータル・ウォー、トータルитарアニズム、核兵器の出現、自然環境の破壊、  
39 倫理的に曖昧な遺伝子操作など、種々の異常な出来事や企図を生み落とす一つの要因となつた  
40 ともいえよう。

41 II

42 [4] 経済システムや政治行政システムに支えられた 20 世紀の科学技術は、自然環境に脅威的  
43 な仕方では影響力を行使し続けてきた。その結果、われわれは、歴史上、未曾有の環境汚染と自  
44 然破壊に直面している。科学技術の影響力は、今日、物質への支配力として作用するだけでな  
45 く、地球上の生命システム全体への悪影響、人間生命それ自体への脅威として作用している。  
46 科学技術は、ことに産業革命以来、過去 200 年余りにわたって、何からも拘束を受けることな  
47 く発展につぐ発展を遂げてきた。自然環境や人間生活への科学技術の影響力は、拡大化され浸  
48 潤化される一方であった。B・コモナーは、こうした事態を、「生命圏」への「技術圏」の一方  
49 的侵略と特徴づけている。環境問題は、20 世紀末には自然環境の危機という文明史的問題へと  
50 転換したといえよう。

51 [5] 同時に、環境危機の問題は、近代における人類と文明社会の罪責を青天白日のもとに暴  
52 露せずにはおかない一面を有している。近代になって人類は際限なき物質的繁栄と生活上の快  
53 適さを追求してきたが、そうした人類の近代的所業は無垢なものではなかった。というのも、  
54 そこに人類の貧りとヒュプリス（傲り）の問題、人類への自然の報復（しっぺ返し）の問題、  
55 さらに人類の所業への歴史の審判の問題が予感されるからである。環境危機の問題が、しばし  
56 ば黙示録的含意を付帯した出来事として認識される所以である。いずれにしても、今日、村上  
57 陽一郎氏の次のような言葉は、十分な重みをもって受け止められる必要がある。

58 「人間にとって、その安全を脅かす最大の要因は、かつてはいざ知らず、近代以  
59 降、人間そのものになった。」

60 [6] さてエコロジーという専門用語の出自についてはよく知られている。ドイツの生物学者  
61 E・ヘッケルが、1866 年に初めてドイツ語で「エコロジー」(Ökologie) という用語を使用し

62 たのである。ヘッケルは、このエコロジーという用語を、有機体的生命とその自然環境とのあ  
63 いだの密接な相互依存と調和の関係を意味する専門的な科学用語として使用した。そしてエコ  
64 ロジー（生態系ないし生態学）は、生命体と自然環境との密接な網の目の相互依存関係そのも  
65 のとして、またそうした相互依存関係および多様性のなかの生命体的調和を研究する生物学の  
66 一分野として確立されていった。

67 [7] エコロジーは、従来の生物学の主流におけるように、生命体を個体として他の生命体や  
68 自然環境から抽象的に隔離して調査する方法に依拠しない。それはむしろ、有機的生命体をそ  
69 の自然環境的背景において、関係性の脈絡に照らして観察し研究する方法に立脚する。こうし  
70 てエコロジーは、とりわけ生命体と自然環境との関係のメカニズム、生命循環の仕組み、エネ  
71 ルギー使用の流れにおける生命体の位置づけに焦点をあてながら、研究を進めていく生物学の  
72 一分野であるということもできよう。そこから導出されるのは、自然環境のネットワークにお  
73 ける調和、多様性、統一性、共存の仕組みである。競争や弱肉強食、衰微や破壊といった自然  
74 環境の実態も、そうした最終的意味での生態系の総体的調和や相互依存関係という巨視的枠組  
75 みのなかで理解される。

76 [8] このようにエコロジーの本来の場は、明らかに広くは自然科学の領域、狭くは生物学の  
77 分野ということになる。そうなると、その専門家以外の人々にはなかなか手の届かない代物と  
78 なってしまう。しかしながらエコロジーは、今日でははるかに幅広い意味で理解されており、  
79 また理解される必要がある。近代産業文明の進展にともない、とくに 20 世紀に入り、人間と  
80 人間をとりまく自然環境との関係が急激に悪化してきた。こうした状況を背景に、人間と自然  
81 環境との関係およびその意味を批判的に考察し吟味する学問分野として、広義のエコロジーが  
82 台頭してきた。

83 [9] 前者の自然科学としてのエコロジーが客観的な観察を旨とする記述的性格を色濃く有し  
84 ているとしたならば、後者のエコロジーは一つの基本前提として、近代産業文明への批判的お  
85 よび規範的視点を保持している。後者のエコロジーは、科学技術の発達や経済発展が、自然に  
86 対する人間行為の影響力を飛躍的に強大なものとし、その結果、人間と自然環境との調和のと  
87 れた関係は破壊され、自然環境内の調和ある生態系は攪乱される傾向にあるとの批判的認識を  
88 有している。こうして後者の広義のエコロジーは、自然諸科学のほかに、経済学、社会学、人  
89 類学、政治学、法学などの社会諸科学はもちろんのこと、哲学、倫理学、歴史学、神学、宗教  
90 学などの人文諸科学を駆使して、学際的に学問上の総動員態勢を敷きつつ、人間と自然環境の  
91 危機に対処する学問領域として確立されつつあるといえよう。

92 [10] けれども、現代世界における自然環境の危機を人心に深く刻みつけたのは、既述した広

93 義のエコロジーと呼ばれる学問領域の台頭ではなかった。むしろそれは、人間と自然環境との  
94 関係にかかわる 20 世紀後半の種々の峻厳な事実の連鎖そのものであったといえよう。

95 III

96 [11] 現代世界における環境危機を作り上げている三つの問題圏ないし範囲に限定して、それ  
97 らを素描しておこう。第一の問題圏は環境汚染として一般化できよう。そこには種々の公害問  
98 題、大気汚染、海洋や河川や湖沼の汚染、土壌の汚染、酸性雨、二酸化炭素の過剰排出、地球  
99 温暖化、オゾン層の破壊、有害な農薬汚染、ダイオキシン汚染、環境ホルモン（内分泌攪乱物  
100 質）問題などが含まれる。この環境汚染という風に一般化される範囲はきわめて広く、上記の  
101 個別的問題はどれをとっても、深刻な事柄ばかりである。環境汚染に関しては、とくに 1986  
102 年のチェルノブイリ原発事故が今なお記憶に生々しい。当時、ゴルバチョフ政権の「ペレスト  
103 ロイカ」路線にはずみをつけたのは、環境危機に関する旧ソ連の一般民衆の危機意識の高まり  
104 であった。東欧諸国や第三世界の国々においても、ことに 1970 年代以降、80 年代から 90 年  
105 代にかけて、自然環境の汚染と破壊のスピードは、決して緩められることなく、むしろ加速さ  
106 れてきた。

107 [12] 東欧諸国においては、70 年代には「社会主義経済は環境汚染とは無縁である」との一昔  
108 前の社会主義の神話がすでに崩壊していた。80 年代以降、東欧諸国は、酸性雨による森林枯死、  
109 森林縮小に起因する大洪水、大洪水を契機に流出した埋蔵産業廃棄物や有害廃棄物による環境  
110 汚染と公害病多発に悩まされてきた。たとえば、1989 年に東欧諸国を席卷した一連の「東欧  
111 革命」は、一面、こうした東欧諸国における環境問題の劣悪化と密接不離に結びついていた。  
112 先祖から受け継いだ美しい自然、山河、森林が産業化にともない破壊され汚染されていくとい  
113 う人々の共通の認識が、東欧諸国の民主化の動きを加速した一つの重要な歴史的要因であった。

114 [13] 地球全体を巻き込む一般性をもったミクロな環境汚染としては、近年とみに話題になっ  
115 てきている残留性化学物質による人体汚染や生命システムの破壊の問題がある。近年、T・コ  
116 ルボーンほか著『奪われし未来』(Our Stolen Future, 1996) が出版された。この書物のな  
117 かで著者たちは、PCB やダイオキシンなどの有害な残留性合成化学物質が、主として食物連鎖  
118 や生体濃縮を通じて、鳥類や魚類や人類を含む哺乳動物の体脂肪や母乳にホルモン攪乱物質  
119 として定着し、生命システム汚染、性器発達障害、生殖異常、乳ガンや前立腺ガン、不妊症、  
120 精子数の減少などを招く複雑な過程と論理とを、きわめて一般的かつ分かりやすい仕方で説明  
121 している。今明らかにされつつあるのは、PCB、ダイオキシン、DDE、リンダンなどの世にい  
122 う環境ホルモンが、生命システムの汚染と破壊を通じて、生命体の生殖能力や発育を著しく阻  
123 害し、人類の生存と生物の種の保存とを脅かしている事実である。

124 [14] 環境危機の第二の問題圏は、人口、食糧、エネルギー問題である。20 世紀に入ってから  
125 の世界の人口の急増は「人口爆発」という表現を生み出したほどに指数的な伸びを示した。統  
126 計的に世界の人口の推移を見ていくなれば、今世紀初頭の世界の総人口は約 16 億と推定され  
127 ているが、1999 年 10 月現在で 60 億に達した。そして 2050 年には、100 億近くになるであ  
128 るかと予測されていたが、世界各地での環境悪化や北アフリカ諸国におけるエイズによる死者  
129 の急増に起因する平均寿命の急激な低下といった悲惨な要因のゆえに、最近では多少とも下方  
130 修正されて、89 億になるであろうと予想されている。このような人口爆発はとくに第三世界の  
131 国々において甚だしいが、これだけの人口を支える食糧とエネルギーの供給がとみに困難にな  
132 ってきたという状況がみられる。食糧不足の問題は人口爆発との関連で飢餓問題という裏面を  
133 もち、その深刻さはとりわけアフリカとアジアの国々で顕著にみられるようになった。食糧不  
134 足および飢餓問題は、南の国々と北の国々との構造的格差を最も明瞭な仕方で示すものとなっ  
135 ている。

136 [15] 現在、世界には 1 日を 1 ドル以下で暮らす「絶対的貧困層」が約 13 億人もいるといわ  
137 れている。さらに気候条件や飢饉などの要因で、アフリカを中心に飢えや栄養不良で数多くの  
138 餓死者が周期的に出ているのも、見逃すことのできない事実である。また世界銀行の推定によ  
139 ると、世界の総人口の約 5 分の 1 が、栄養不十分な人口とされ、そのほとんどの人口が南の国々  
140 に集中している。反面、北の富裕なくつかの国々では食糧の備蓄量や在庫量は空前の数字を  
141 示しており、また一部では「飽食文明圏」として飽くなき美食が追求され、大量の食糧が残飯  
142 として捨てられている。南の国々と北の国々との構造的不正ないし配分上の不平等の問題は、  
143 食糧問題と飢餓問題において最も先鋭的な仕方で表されている。

144 [16] エネルギー問題についてみるならば、人間一人当たりのエネルギー消費量はこの 100 年  
145 間に約 60 倍に膨れ上がったといわれる。そしてアメリカ合衆国や西欧諸国や日本並みの「豊  
146 かな社会」を目指してきた中国や NIES（新興工業経済群）と呼ばれる国々は、1990 年代末ま  
147 では都市の中産階級に関して大量消費型ライフスタイルを可能にさせるところまで、経済成  
148 長と近代化路線の確立に成功したといえよう。たとえば中国では、96 年の統計によれば、都市  
149 生活者に限定されるが、家電製品の普及率はテレビが一世帯に平均 1.2 台、電気洗濯機は 9 割  
150 強、電気冷蔵庫は 7 割である。中産階級の関心は今や自動車とエアコンである。中国の大都市  
151 におけるモータリゼーションの普及のスピードはすさまじい。10 年程前には朝夕、自転車で埋  
152 めつくされた北京や上海の目抜き通りは、今では自動車の大渋滞で、排ガスの臭いが立ちこめ  
153 るほど、様変わりしているという。中国の自動車保有台数は 1980 年には 93 万台であったのが、  
154 96 年には 12 倍の 1,145 万台に増えたと指摘されている。こうしたモータリゼーションの波は、  
155 総人口が 12 億 7 千万（1999 年 7 月現在）といわれる中国の各地域に波及し、やがてアメリカ

156 型の高速道路が中国の国土に網の目のように張りめぐらされる方向に行くだろうとの予測も一  
157 部ではなされている。

158 [17] 中国や NIES と呼ばれる国々が、はたして近い将来、現在のアメリカ並みのエネルギー  
159 消費の水準に到達するかどうかは疑わしい。しかし、これらの国々が、アメリカの水準に肉薄  
160 するようなことになれば、化石エネルギー資源に依拠した現状のエネルギー供給のやり方では、  
161 地球が三つあっても間に合わないという計算が出ている。技術問題としては、太陽エネルギー  
162 のような恒常的供給が可能な自然エネルギー資源をいかに開発していくのかといった課題が、  
163 ますます重要性を増してきたといえる。

164 [18] 環境危機の第三の問題圏は熱帯林の破壊の問題である。過去半世紀のあいだに地球の森  
165 林面積は約半分に激変したといわれる。アマゾンの熱帯林地帯はこの 20 年間にほぼ半減した  
166 といわれている。1997 年は世界中で大規模な山火事が発生した年であった。とりわけ同年 8  
167 月に焼畑を契機にインドネシアのカリマンタン島で発生した山火事は、異常気象で雨期の到来  
168 が遅れたことも手伝って、半年以上に渡って燃え続け、その煙害は近隣諸国にも及んだ。この  
169 大規模な森林火災の被害は、大気汚染もさることながら、貴重なインドネシアの原生林 10 万  
170 ヘクタールをも含み、動植物に多大なダメージを与えることになった。

171 [19] 熱帯林の急速な消失は、人類がいかに激しく他の無数の地球上の生命体 動物と植物  
172 の双方を含む の棲息地を破壊し、絶滅に瀕している貴重な生命体の存続を脅かし、地球全  
173 体の大気圏の状態を悪化させ、温暖化やオゾン層の破壊を誘発しているかの証左であると言っ  
174 てよいであろう。毎年、数千に及ぶ動物や植物の種が、地上から消滅し、数千にも及ぶ種が絶  
175 滅の危機に直面していることが報告されている。また熱帯林は、二酸化炭素を酸素に変え、大  
176 気圏の清浄化に不可欠な機能を果たしてきたが、その機能が失われ、またそれを代替するもの  
177 もない。

178 [20] 地球からの熱帯林の消失の問題に関しても、熱帯材輸入の超大国である日本には大きな  
179 責任がある。この 20 年ほどで先進産業諸国による熱帯材の輸入は約 16 倍に膨れ上がり、その  
180 内訳をみると、日本が全体の約半分を占めている。とりわけアジア諸国からの熱帯材の輸入の  
181 場合は、6 割以上が日本に輸入されている。日本は 1950 年代と 60 年代は主としてラワン材を  
182 フィリピンから輸入した。そして 70 年代前半はインドネシア、70 年代以降、現在にいたるま  
183 でマレーシアからもっぱら輸入している。一国の森林資源を食いつぶして、他の国に次々に鞍  
184 替えするという日本のやり方に非難が集中している。

185 IV

186 [21] 上記のように、環境危機の三つの問題圏に限定してみても、環境問題という視点に立脚

187 する時に、21 世紀における「宇宙船地球号」の運航は、はなはだ心もとないというのが実情で  
188 ある。現代の深刻な環境問題を引き起こした根源的な要因があるとするならば、それは、人類  
189 の経済的行為と科学技術の影響力が、地球の生態系の有する受容能力・供給能力をはるかに凌  
190 駕する仕方であらわれ大規模化されたことにほかならない。こうした危機的状況において、  
191 具体的で地道なローカルな環境保護の努力とともに、大所高所からのグローバルな解決策が緊  
192 急の課題として認識されるようになったのは、当然のことである。それにしても、環境危機は  
193 30 年前とはうってかわり、先進産業諸国の問題にとどまらず、むしろ東欧諸国や第三世界の国々  
194 でその亀裂を深めており、まさに地球全体の問題となってきた。

195 [22] 種々の学説があるようだが、一説によれば、地球は約 45 億年前にできあがり、生物は 2  
196 億年前に地球に姿を現し、人類は 400 万年前に生まれたにすぎない。しかし、「人類という名  
197 のスーパー動物は、・・・地球の歴史のほんの一瞬ともいべきこの 200 年ないし 100 年間  
198 に地球の表面を猛烈な勢いで変えてしまった」(石弘之氏)のである。45 億年もかけて徐々に  
199 地球上に貯蓄されてきた自然環境の資本(キャピタル)を、人類は、とりわけこの 200 年間に、  
200 殖やすことに手を貸すどころか、むしろそれをひとりで食い潰してきたといえるであろう。そ  
201 して石氏が指摘した巨大な地球上の変化が、45 億年の地球の歴史のなかで産業革命以来のこの  
202 200 年間に生じたという事実を考える時、それがいかに異常な事態であるのかは、第二次大  
203 戦後のアメリカの環境保護運動の指導者の一人であった D・ブラウアーの指摘をまつまでもな  
204 く、明らかである。ブラウアーは、45 億年の地球の歴史を、聖書の「創世記」にならって月曜  
205 日から始まる 1 週間になぞらえてみる時、以下のような計算になると述べている。(ただし、  
206 ブラウアーは、人類の誕生を、約 140 万年前とみているようである。)少し長くなるが、紹介  
207 しておきたい。

208 「最終日の日曜日の午後 4 時になって、やっと恐竜が出現する。それから 5 時間  
209 経過した夜 9 時、セコイアが土中から頭をもたげる時分に、恐竜は姿を消す。人  
210 類の出現は、日曜日の午前零時 3 分前にすぎない。午前零時 4 分の 1 秒前にキリ  
211 ストの誕生があり、40 分の 1 秒前に産業革命が始まる。そして今、日曜日の午前  
212 零時。われわれの周囲には、40 分の 1 秒前から始めたことを、将来無限に続けて  
213 ゆけると信じる人々で満ちみちているのだ。」

214 ブラウアーが示したように、地球の歴史という法外に長大な時間的パースペクティブから観察  
215 した時に、人類の歴史はまことに微小なものでしかないことを認識できる。またわれわれは今、  
216 宇宙飛行士たちの撮影した写真を通じて、宇宙の彼方からみた青白く美しく輝く地球の映像を  
217 手にしている。宇宙という法外に遠大な空間的パースペクティブから地球を見る時、まさに宇  
218 宙の奇跡とでも呼ぶべき生命生息の地たる地球の尊貴性、脆弱さ、また微小さを実感させられ  
219 るのである。たしかに雲の渦のなかに晴朗な輝きを放つ地球は美しい。こうした時間と空間の  
220 宇宙的長大さから地球の日々の営みを眺める時、われわれは、宇宙の造化の不可思議さ、尊厳、

221 また奇跡性を実感せずにはいられない。地球の存在に対して一種の宗教的畏怖の念すらいだか  
222 ざるを得ないであろう。M・ガンディーの以下のような観察は、このような尊き地球に生息す  
223 ることを許された人類への警告の言葉として響いてくる。

224 「大地は一人ひとりの必要（ニーズ）を満たすだけのものは与えてくれるが、人  
225 間の貪欲を満たしてはくれない。」

226

V

227 [23] 文明史的観点からみた時に、紀元前 8, 000 年頃にいわゆる「農業革命」が生起したとい  
228 われる。その一大変革期に人々は、馬や牛を家畜として飼育し、野生の植物から米や野菜など  
229 を人間社会に適合したものへと作り変えて、食糧の安定した供給の手筈を整えたのであった。  
230 この時期には地球上の人口は 500 万人程であったと想定されているが、この「農業革命」のた  
231 めに人口の漸次的増加が可能になったといわれる。この第一の革命はまた、地球環境にも多大  
232 な影響を与えたことは言うまでもない。第二の巨大な変化は、通常「産業革命」と呼ばれてい  
233 る。これは、食糧供給、人口増加、地球環境への影響力という点で「農業革命」に匹敵する大  
234 きな変容を意味していた。この第二の革命としての「産業革命」は、西欧諸国を中心にして 16  
235 世紀から 18 世紀までに生起した自然科学や機械の発展に基礎をもちつつ、19 世紀前半に産業  
236 構造の大きな変容をもたらした。そして近代の産業文明の発展は、とくに 19 世紀後半から今  
237 日にかけて、人間社会と自然環境の双方に巨大かつ多様な衝撃を与えた。その結果、17 世紀に  
238 は 5 億人ほどであったと推定される地球の人口も、その 200 年後の 19 世紀の中頃には二倍の  
239 約 10 億人になった。さらに驚異的なのは、それから 150 年後の現在、約 60 億人が地球上に生  
240 息しているという事実である。そのあいだに単純な機械は高度な科学技術へと転換し、産業や  
241 科学技術は指数的な勢いで発展していった。そして今日、D・ピレイジスは、「第三の革命」  
242 が静かに始まっており、それは「地球規模の生態学的政治」(global ecopolitics) という名の  
243 革命であると述べている。

244 [24] 残念なことに、ピレイジスは、「地球規模の生態学的政治」という「第三の革命」の意味  
245 内容について、具体的に何も提示していない。そしてまた、現在、生起しつつあるとされるこ  
246 の巨大な変容を、ピレイジスが述べたように、「地球規模の生態学的政治」の始まりと呼ぶべき  
247 かどうかに関して、さまざまな異論があり得ることであろう。しかしながら、彼の仮説に関し  
248 て、以下の二点については、多くの人々の合意が取りつけられるのではなかろうか。第一点は、  
249 「産業革命」のパラダイムをそのまま人類史の未来に持続するのはもはや不可能であるという  
250 認識である。第二点は、コインの裏面として、エコロジカルな未来を保障する地球規模のヴィ  
251 ジョン、それに適合する新たな経済様式や生産様式、それに相応しい新たな政治行政システム  
252 とネットワークを、今日ほど必要としている時代はないという認識である。

253 [25] 近代の政治を作り上げている主要な諸契機として認識されてきた支配、紛争、権力闘争、  
254 利益配分、調停、統制などは、当然のことながら、現代政治にとっても基本的なものであるこ  
255 とに変わりはない。現実の政治に関するリアルな認識にとって、支配、紛争、調停、統制など  
256 の諸概念は、今日の権力政治や利益政治の重要な内実を映し出すものである。その意味で「後  
257 期近代」とも呼称される現代世界は、政治の領域においても近代の基本的諸前提を大幅に継承  
258 するものといえよう。しかしながら、現代世界においては、これら近代的諸前提に加えて、現  
259 代的意味での「生存の政治」(politics of survival)をつけ加えて理解する必要がある。とい  
260 うのも、近代政治の大前提であった主権的国民国家の枠組み、そしてそれが含意するところの  
261 排他的な領土権や主権的統治の概念は、地球規模の対応を迫る核兵器問題や環境問題には不  
262 十分であることは一目瞭然だからである。再吟味が求められているのは、一国家、一政治社会の  
263 国益や安全保障に焦点をあてられた従来の政治的思考にほかならない。むしろ今日、必要とさ  
264 れているのは、地球規模の人類全体の共通利益と生存への可能性という観点から政治を新たに  
265 認識していく視座の転換である。

266 [26] さて「生存の政治」とは、現代世界の環境危機への配慮と責任遂行と解決の模索を基軸  
267 として、現代という時代が要請するところの政治のタイプと称することができよう。地球規模  
268 で展開される「生存の政治」の模索は、まさに開始されたばかりである。1992年にリオデジ  
269 ャネイロで開催された地球環境サミットが、その一つの出発点であったのかもしれない。政治  
270 学者 J・オールマンによれば、今日、地球規模の政治学的思考が要請されている。そして政治  
271 学は、「たえず変化しつつある物理的・知的な挑戦に対処する人間および社会の一つの方法」と  
272 して再認識される必要があると指摘されている。さらにオールマンは、政治を、「人類の生存を  
273 保証するための唯一最重要な手段」として理解する視点を提示している。彼の著作『創造の政  
274 治学』(Creative Politics, 1975)は20年以上も前の作品ではある。しかし、そこにはすでに  
275 「生存の政治」の輪郭が、はっきりと打ち出されていた。そこに確認できるのは、主権的国民  
276 国家の国益と権力追求への排他的関心といった近代的な前提から、政治の営みを解放しようとす  
277 る自覚的な試みである。地球規模の「生存の政治」は、まさに緒に就いたばかりであるが、21  
278 世紀において一つの無視し得ない潮流になる運命を帯びた政治のタイプとして理解しても、間  
279 違いではないであろう。

参考文献

- ジョー・オールマン 『創造の政治学』(内山秀夫ほか訳、而立書房、1976年)
- ドミニク・シモネ 『エコロジー』(辻由美訳、白水社、1980年)
- 石弘之 『地球環境報告』(岩波新書、1989年)
- 石弘之 『地球環境報告II』(岩波新書、1998年)
- 立花隆 『エコロジー的思考のすすめ』(中公文庫、1990年)
- 大来佐武郎監修 『講座・地球環境』全5巻(中央法規、1990年)
- バリー・コモナー 『地に平和を』(松岡信夫訳、ダイヤモンド社、1994年)
- シア・コルボーンほか 『奪われし未来』(長尾力訳、翔泳社、1997年)
- 村上陽一郎 『安全学』(青土社、1998年)
- E. F. Schumacher, *Small Is Beautiful: Economics as if People Mattered* (New York: Harper & Row, Publishers, 1973).
- Dennis Pirages, "The Origins of Ecopolitics," in *Toward a Just World Order: Studies on a Just World Order, Vol. I*, eds. Richard Falk, Samuel S. Kim and Saul H. Mendlovitz (Boulder, Colorado: Westview Press, 1982).
- Hans Jonas, *The Imperative of Responsibility: In Search of an Ethics for the Technological Age*, trans. Hans Jonas with David Herr (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1984).
- Anna Bramwell, *Ecology in the Twentieth Century* (New Haven: Yale University Press, 1989).
- Herman E. Daly and John B. Cobb, Jr., *For the Common Good: Redirecting the Economy toward Community, the Environment, and a Sustainable Future* (Boston: Beacon Press, 1989).
- Andrew Dobson, *Green Political Thought* (London: Harper Collins, 1990).
- J. Ronald Engel and Joan Cibb Engel, eds., *Ethics of Environment and Development: Global Challenge, International Response* (Tucson: The University of Arizona Press, 1990).
- William Ophulus and A. Stephen Boyan, Jr., *Ecology and the Politics of Scarcity Revisited* (New York: W. H. Freeman and Company, 1992).
- Thom Kuehls, *Beyond Sovereign Territory* (Minneapolis and London: The University of Minnesota Press, 1996).
- Lester R. Brown, et al., *State of the World 1999* (New York and London: W. W. Norton & Company, 1999).

I. 以下の問い(1-10)は、それぞれ二つの文章からなりたっている。資料に基づいて、著者の見解と一致するものを、次の a, b, c, d のなかから一つ選びなさい。

- a. (1), (2) とともに正しい。
- b. (1) は正しいが、(2) は誤りを含む。
- c. (1) は誤りを含むが、(2) は正しい。
- d. (1), (2) とともに誤りを含む。

1.

- (1) 著者は基本的に 20 世紀を光と陰の両面で認識しているが、20 世紀の混乱と苦悩の面を厳密に検討していく必要を提起している。
- (2) 著者は、20 世紀を特徴づけてきた現代科学と科学技術の飛躍的進展を必ずしも手放しで歓迎してはいない。

2.

- (1) 環境危機の問題は一般的に北の裕福な国々に集中しており、南の国々は比較的に安全な状況にある
- (2) 環境危機の問題には文明史の宿命のようなものがあって、人類が罪責感を覚えるべき事柄ではない。

3.

- (1) 放射能汚染は環境汚染のカテゴリー(範疇)には属さない。
- (2) エネルギー問題は厳密には環境危機の問題とはいえない。

4.

- (1) 20 世紀を特徴づけたイデオロギーのなかには、無思想性もはいる。
- (2) 全体主義はとくに 20 世紀に猛威を振るったが、20 世紀の前にも世界各地でしばしば出現をみた政治的イデオロギーである。

5.

- (1) 著者は、環境問題を「生命圏」への「技術圏」の一方向的侵略として特徴づけた B・コモナーに基本的に賛成である。
- (2) 著者が、今日の環境危機を「文明史的問題」(資料 [4]) と捉えているが、そのことの意味は、人間と自然環境との関係において、かつての「農業革命」や「産業革命」に匹敵するような大きな変容が、環境危機を通じて起こったということである。

6.

- (1) 著者の指摘によれば、「エコロジー」という概念はもともと自然科学の一分野を示す概念であったが、後に「環境問題」との関連で学際的な概念としての意味をも保持するようになった。
- (2) 著者にとって「エコロジー」の概念は純然たる自然科学的概念であるが、他方、「環境問題」は、自然科学、人文科学、社会科学を網羅した学際的な概念である。

7. 「地球の存在に対して一種の宗教的畏怖の念すらいだかざるを得ないであろう」(資料[22]) という文章がある。その理由に関する著者の見方は、次の通りである。

- (1) 地球の存在は、偶然の所産とは思われない程の驚くべき調和、美しさ、精巧さ、力強さを備えているから。
- (2) 地球の存在は、時間と空間の宇宙的長大さのなかで捉え返される時、稀有な出来事のように思われるから。

8. 「地球規模の生態学的政治」が文明史的に「第三の革命」を意味しているとの D・ピレイジスの見解に対して、著者の見方は次の通りである。

- (1) ピレイジスの見解は、環境問題を文明史という枠組みから見たきわめて巨視的なものであるが、示唆的でもある。ただし難点は、環境問題の歴史的重要性を過大評価しているところである。
- (2) ピレイジスの見解は環境問題の深刻さへの十全な認識を示している点で啓発的であるが、単なる命題の提示に終わっており、具体的内実が示されないという難点をもっている。

9.

- (1) 資料において著者は、環境問題への関心と民主化との関連については沈黙を守っている。
- (2) 資料において著者は、環境問題を引き起こした主たる要因を、人間の側の道徳的欠陥に求めている。

10.

- (1) 「生存の政治」は、権力闘争や支配や調停を骨子とする近代的政治の主流とは相容れない面をもつが、それに全面的に取って替わるものではない。
- (2) 「生存の政治」が、21世紀の政治の主流として定着しない限り、環境問題の解決はあり得ない。

II. 以下の問い(11 - 40)について、それぞれの設問に答えなさい。

11. 20世紀に関する以下の諸見解のうち、必ずしも著者の見方でないものはどれか。

- a. 20世紀において科学技術が祝福の源泉のみではないことが明らかにされた。20世紀は、一面、科学技術的知の発展が、暴力主義や価値判断停止というイデオロギーと結びついた形跡がある。
- b. 20世紀は深刻な問題群に彩られた世紀であったが、しかし暗黒面ばかりではなかった。貧困の克服、科学技術の発展、人権保障や民主主義の展開など、一部には光明が見られたことも否定できない。
- c. 20世紀は、科学と科学技術の進歩の世紀、経済発展の世紀、自由主義と民主主義の勝利の世紀、合理主義の隆盛の世紀として積極的に評価される傾向にある。はたしてそのような輝かしい世紀という仕方で理解してよいのか、はなはだ疑問である。
- d. 20世紀はトータル・ウォー、トータルитарリズム、核兵器の出現、環境危機などの陰の部分も多々あったが、経済的繁栄、自然の脅威の克服、生活の利便さの増進なども見られ、光と陰とが共存し、功罪相半ばし、その評価はきわめて難しい。

12. 著者は「20世紀を特徴づけてきた暴力主義とイデオロギー支配は、今なお衰える兆しを見せていない」(資料 [2]) と述べているが、著者の考えで「20世紀を特徴づけてきた暴力主義とイデオロギー支配」に帰属しないものは、次のどれか。

- a. 広島と長崎への原爆投下
- b. DNA 組み換え
- c. 二つの世界大戦
- d. 熱帯林の消失

13. 20世紀にはいり、社会科学が現実の問題へと適用されるようになってきた。次のうち 20世紀より前にみられたものはどれか。

- a. 政治学による投票行動の研究が進み、選挙結果の予測が可能となった。
- b. 経済学により一国の経済力の大きさを示す指標 (GNP など) が開発された。
- c. 経営学が誕生し、企業の経営に理論的指針を与える道が開けてきた。
- d. 企業の経営の実体を計数的に示す複式簿記が開発され普及してきた。

14. 以下の書物のうち、20世紀の全体主義の悪夢と直接関係のないものはどれか。

- a. G・オーウェル 『1984年』
- b. A・フランク 『アンネの日記』
- c. O・シュペングレー 『西洋の没落』
- d. V・E・フランク 『夜と霧』

15. 20 世紀の初めに地球上には未知未踏の場所がいくつか残されていたが、次々と踏破されていった。20 世紀の最後の冒険といえるものはどれか。

- a. S・ヘディングが中央アジアの探索を行った。
- b. E・ヒラリーがエベレストに登頂した。
- c. R・ピアリーが北極点に到達した。
- d. R・アムンゼンが南極点に到達した。

16. 「焼畑農業」について述べた以下の文章のうち誤っているものはどれか。

- a. 熱帯で一般にみられる粗放的な農業形態である。
- b. 肥料は森林を焼きはらった際に生じる灰である。
- c. 伝統的な農耕文化の一類型として定住型の農業形態でもある。
- d. 作物は主としてキャッサバ、タロイモ、あわなどの穀物である。

17. 「宇宙船地球号」のメタファーが含意する意味合いとして、最も適切なものはどれか。

- a. 地球に生息する人類の運命共同体としてのあり方
- b. 21 世紀における地球の生命体の相互依存のあり方
- c. いわゆる「裕福な国の浪費」を戒める比喻
- d. 人間中心主義的な地球観から脱却を目指す比喻

18. 以下の書物のうち、環境問題のテーマに直接関連しないものはどれか。

- a. 和辻哲郎『風土』
- b. 石牟札道子『苦海浄土』
- c. R・カーソン『沈黙の春』
- d. ローマ・クラブ『成長の限界』

19. 酸性雨、フロンガスなどの問題には国境がなく、世界全般に拡散することが問題である。海も本来そのような性格をもっており、江戸時代には海は「江戸の日本橋より唐、オランダ迄境なし」と述べた人がいる。次の誰か。

- a. 林子平
- b. 間宮林蔵
- c. 工藤平助
- d. 高野長英

20. 総合的調和ないし相互依存の関係を最もよく表している社会科学の理論はどれか。
- a. 法律学における罪刑法定主義論
  - b. 経済学における一般均衡論
  - c. 政治学における大衆民主主義論
  - d. 経営学における企業関係論
21. フロンガス使用全廃の方向づけに直接関係のないものはどれか。
- a. モントリオール議定書 (1987 年)
  - b. ヘルシンキ条約 (1989 年)
  - c. ロンドン議定書締結国会議 (1990 年)
  - d. リオデジャネイロ宣言 (1992 年)
22. 以下の人物のうち、初期近代の科学革命と必ずしも関係のない人物は誰か。
- a. デカルト
  - b. ニュートン
  - c. ガリレイ
  - d. ダーウィン
23. 以下の事柄のうち、F・ベーコンに直接関連しないものはどれか。
- a. 『新機関』(ノーヴム・オルガヌム)
  - b. 神の見えざる手
  - c. 帰納法の積極的意義の強調
  - d. イギリスの経験論哲学
24. 以下の項目は、「大衆消費社会」の否定的な傾向性を述べたものだが、必ずしも該当しないものはどれか。
- a. 傍観者の無関心
  - b. 人々の孤立化と孤独化
  - c. ライフスタイルの画一化
  - d. 貧富の差の拡大

25. 以下の事柄のうち、核軍縮と直接関係のないものはどれか。
- a. SALT-I
  - b. CTBT
  - c. OECD
  - d. NPT
26. NIES（新興工業経済群）と呼ばれる国々に含まれない国は、どの国か。
- a. シンガポール
  - b. 韓国
  - c. 香港
  - d. インド
27. ポスト冷戦と直接関連のない出来事はどれか。
- a. マルタ会談の開催
  - b. ソビエト連邦の崩壊
  - c. ウェストファリア条約の締結
  - d. ベルリンの壁の崩壊
28. 酸性雨とは pH（ペーハー）5.6 以下の雨をいう。酸性雨とは直接関連のないものはどれか。
- a. 窒素酸化物
  - b. 硫黄酸化物
  - c. 緑の黒死病
  - d. フロンガス
29. 「人口」はいろいろな形で定義されるが、次のうち誤っているものはどれか。
- a. 幼年人口　14 歳以下の人口
  - b. 生産年齢人口　15 歳以上、64 歳以下の人口
  - c. 労働年齢人口　20 歳以上、60 歳以下の人口
  - d. 老齢人口　65 歳以上の人口

30. 森林問題に関して述べている次の文章のうち、誤っているものはどれか。
- a. 東南アジアや南洋諸島の熱帯雨林はこの半世紀のあいだに6割ほど減少した。
  - b. アフリカ中央部の熱帯雨林は大半が消え失せ、風通しのよい疎林になった。
  - c. 北の針葉樹林も、北欧、東中欧、シベリアでは酸性雨の被害が大きい。
  - d. 日本の国土は7割が森林で覆われているが、そのほとんどが植林による。
31. 環境ホルモンによる生命システムの汚染と破壊に直接関係しないものはどれか。
- a. ここ20年ほど、ホッキョクグマに母乳の汚染、生殖異常などが顕著にみられるとの事実が確認されている。
  - b. 近年、ダイオキシンによるヒトの精子数の減少について、世界各国から数多くの報告が寄せられている。
  - c. 水俣病は、1950年代以降、熊本県水俣湾周辺で魚貝類を食べた住民がかかった有機水銀による中毒症であり、死者を含む多数の患者が発生した。
  - d. ここ30年ほど、アメリカ合衆国の五大湖周辺、ワシントン州、オレゴン州、メイン州などで、ハクトウワシの奇形の増加や生殖能力の低下が報告されている。
32. 以下の諸項目のうち、国家の構成要素として必ずしも適切でないものはどれか。
- a. 国民の存在
  - b. 委任統治機関としての政府
  - c. 独立国家としての主権
  - d. 一定の領土
33. 「化石エネルギー資源」(資料 [17]) について述べた以下の文章のうち、誤っているものはどれか。
- a. 石炭、石油、天然ガスなどの化石エネルギー資源は、埋蔵量にも限界があり、有限エネルギー資源とも呼ばれている。
  - b. 石油が主役となったのは、1940年代から50年代にかけて中東の大油田開発以降である。第二次大戦後の石炭から石油へのエネルギー源の移行は、通常、エネルギー革命と呼ばれている。
  - c. 一説によると、石炭の埋蔵量は石油の約5倍といわれているが、石炭は費用をかければ液化も可能である。また石炭の場合、環境負荷は石油に比べてはるかに小さい。
  - d. 天然ガスは水素含有量が高いので、カロリー当たりの炭酸ガス排出量も少なく、比較的クリーンである。

34. 「自然エネルギー資源」(資料 [17]) の説明として、誤っているものはどれか。
- a. 水力、風力など自然現象に基づくエネルギー
  - b. 太陽光や太陽熱などの再利用によるエネルギー
  - c. 環境汚染を起こしにくいクリーン・エネルギー
  - d. 動物の糞などを利用する生物エネルギー
35. 著者の指摘によれば、東欧諸国において一昔前には、「社会主義経済は環境汚染とは無縁である」(資料 [12]) との社会主義の神話が受容されていた。そのように考えられていた理由として適切なものはどれか。
- a. 社会主義経済は国家による「中央計画経済」であるので、環境問題の管理と指導が徹底していると考えられたから。
  - b. 社会主義経済による「社会関係の是正」とくに経済関係における不平等、搾取、抑圧の除去は、環境問題への防御となるから。
  - c. 社会主義経済は「生産手段」(土地、機械、工場など)が「国有化」されるか、「協同組合の所有」となるので、自然環境の搾取は起こり得ないから。
  - d. 社会主義経済の「生産」の概念が、そもそも自然環境への負荷を最小限に抑えることを合意していると考えられたから。
36. 「エコロジー」の概念規定に関連して、著者の見方とは必ずしも適合しないものはどれか。
- a. 生命体とそれを取りまく自然環境との相互依存と調和のシステムである。
  - b. 生物学の一分野であり、生命体と自然環境との関連を研究対象とする。
  - c. 生命中心主義の哲学、人間と自然との共生の哲学を背景とした思想運動である。
  - d. 人間と自然環境との関係を、批判的かつ規範的に問おうとする学際的分野である。
37. 環境危機の問題がはらむ「黙示録的含意」(資料 [5] 頁)の内容として、直接言及されていないものはどれか。
- a. 人類の貧りや傲りに対する歴史の審判の可能性
  - b. 人類による自然破壊に対する自然の報復の危険性
  - c. 環境破壊が世界の終焉を予示する可能性
  - d. 人類が文明的努力を通じてみずからの破局を準備する危険性

38. 社会科学は、一面、「価値自由」(value-free)という前提で理論を作り上げようと試みてきた傾向にある。資料の記述から考えて、「価値自由」の前提に対して著者はどのような姿勢を採用していると推測されるか。次のうち最も適切なのはどれか。

- a. 「価値自由」の態度とは、客観的な社会科学的認識を目指す探究者が必ずとらねばならない社会事象に対する禁欲的態度である。それゆえに「価値自由」によって作られた認識や理論でないかぎり、普遍性をもち得ない。
- b. 有意義な価値を具有する理論を作るために、「価値自由」の態度でもって普遍理論の構築を目指していかねばならない。「価値自由」の態度は、社会学者の場合も、自然科学者が客観的な観察や認識を目指すのとまったく同じであり、それはすべての社会学者に要求される。
- c. 「価値自由」が探究者の先入見や偏見を極力排除するという意味であるとすれば、それは正しい研究態度である。しかし、その意味するところが、社会現象の認識や評価に関して探究者の価値観や判断を全面的に除外するというのであれば、それは不可能であり、また好ましくもない。
- d. この資料を読むだけでは、著者が社会科学的認識の問題との関連で「価値自由」の問題をどのように理解しているのかを把握するのは不可能である。

39. 著者は 21 世紀の政治の一つのあり方として「生存の政治」の可能性を考えているようである。その理由として著者の考え方と必ずしも合致しないものはどれか。

- a. 主権的国民国家の枠組みで各国それぞれの国益の追求を大前提とする政治では、人類の生存といった地球規模の対応や取り組みは期待できないから。
- b. 地球上の国々が、「地球益」ないし「人類益」の増進のために、相互に協力しあう政治を確立する必要があると考えるから。
- c. 地球全体の環境危機に直面する時に、従来の国家単位の支配や権力闘争や利益配分の政治だけでは、大所高所に立った解決策を打ち立てることは不可能と考えるから。
- d. 20 世紀の経済発展が人間の欲望や利己心に訴えることで実現したが、環境問題の解決も、各国が自由競争の精神で競い合うことが重要だと考えるから。

40. 以下の諸見解のうち、環境問題に関する著者の基本的な考え方と必ずしも合致しないものはどれか。

- a. 環境問題は、20 世紀末において時代の危機的問題群のなかの一つとして位置づけるだけではすまなくなっており、文明史的展望のもとで考察されるべき事柄となりつつあるのではないか。
- b. 近代の産業文明の枠組みを変更することは困難であり、現在の経済システムを前提としたうえで環境問題の改善をはかる「環境主義」(environmentalism)と呼ばれるアプローチが、最も現実に即応しており、適切ではないか。
- c. 環境問題にはアイロニー(皮肉)がみられるが、その最たるものの一つは、「人間にとって、その安全を脅かす最大の要因は、かつてはいざ知らず、近代以降、人間そのものになった」(村上陽一郎氏)というアイロニーではないか。
- d. 環境問題を考えるにつけ、「かけがいのない地球」(only one earth)といった地球の存在の尊さに対する宗教的畏怖の念すら抱かざるを得ないのではないか。